

*Local Cultures, Global Change.*  
Routledge, 1993 59-69 (D. マッシー,  
加藤政洋訳「権力の幾何学と進歩的な場所感

覚」『思想』2002年1月号 32-44)

(竹内啓一)

**Doreen Massey, John Allen and Philip Sarre (eds.) : *Human Geography Today***  
(D. マッシー・J. アレン・P. サレ (編) 『今日の人文地理学』)  
Cambridge: Polity Press 1999. xii and 340 p.

「人文地理学」と呼ばれる学問が、今日の知的営為の世界に多くのものをもたらしているし、その中で刺激に満ちた議論が展開されていることは、大方において承認されるであろう。そのような議論に焦点をあて、その建設的な発展をはかるために、イギリスの放送大学の地理学スタッフが編集した「ある種のマニフェスト」が本書である。

「今日の知的営為の世界」を特徴づけるものとして編者・執筆者に共通する問題意識は、社会諸科学・人文諸科学を通じて「空間論的転回(spatial turn)」と呼ばれるべき空間の意味の見直し・再評価が進行しているということである。そして、そのような今日の人文地理学の論争点を提示するために編者たちがとった戦略は、まず本書の独自の構成にあらわれている。経済地理学、政治地理学などという「地理学」に形容詞をつけた区分が当然考えられるが、今日の人文地理学でなされている最良の議論は、この種の区分の意味を減少させる方向でなされているのであり、そのような区分の境界線を引くことにより、議論の最も生産的な部分を切り捨てる事になるという理由から、そのような構成案は企画の早い段階で否定された。階級、エスニシティー、ジェンダーといった対象ごとに論じるという構成案も、今日の人文地理学の焦点をおおいくつすことの困難に加えて、フェミニズム地理学とポストコロニアル地理学とが人文地理学全般に挑んでいる挑戦を完全に提示できないという理由から、本書ではとられなかった。

今日の人文地理学に大きな変化をもたらしつつあるいくつかの言説、文化論的転回(cultural turn)、ポスト構造主義、ポストモダニ

ズムに関するものは、本書全体に大きく反映されることにはなったが、これらの言説自体はとくに地理学的なものではないので、本書の構成の単位にはされなかった。結局、本書でとられている構成は、「地理学的に理論化する」5つの局面あるいはパートに分けて、そこに15の章を分けて配列するというもので、各パートにおいては、人文地理学が世界を解釈する固有のポジショニングである「空間・場所・自然」という三題が必ず議論されるような配慮がなされた。

また、すべての執筆者に共通して、今日の人文地理学が、当初は隣接諸科学において開発され発展した概念・アプローチを取りいれていることを承認すると同時に、あくまでそれらの概念・アプローチを、「明白に地理学的な理論化」に用い、このような「空間・場所・自然」の観点を強調する「特殊に地理学的な諸アプローチ」に連接させる(articulate)ことによって、広く社会理論に貢献しなければならないことが強調されている。

このような構成に、まず本書の特色、そして長所と短所とが非常によく表れていると考えられるので、まず構成にしたがって本書の内容を簡単に紹介する。5つのパートは、それぞれが今日の人文地理学の理論的問題点(issues)に対応すると考えられているのであるが、第1部は「人文地理学の『本質』」と題され、まず第1章はマッシーと編集集団の共同執筆による本書全体に対する序章である。ここでとくに強調されているのは、文化と自然、現実と表象、権力と抵抗、中心と周縁といった二元論または二項対置の図式を克服しなければならないということである。このようなポスト構造主義の立場は、

すべての執筆者によって共有されていて、多様性、異質性(heterogeneity)、関係論的視座といったことが、本書全体を通じて、繰り返し調子を変えつつ強調されている。このような第1章に続くS. ウオットモアの「ハイブリッドの地理学：人文地理学における『人文』を再考する」は、ハーヴェイなどの自然と文化とを対置し、自然を社会的構築物とみなす地理学的弁証法に挑戦するものである。J. マードック、N. J. スリフトなどによって、1990年代後半になって地理学でも注目されるようになったB. ラトゥールとM. セールのアクター・ネットワーク理論によりながら、彼女は「人文的」なものから「非人文的」なものまでを社会組織と関連づけることを主張するのであるが、これは彼女自身が認めるように、言うは易く行う(地理学の研究において実践する)のには多くの困難がともなうであろうし、そのような実践の方向への展望もこの章では与えられていない。

第2部は「想像の地理」と題され、G. ヴァレンタイン、D. スレイター、M. J. ワッツによる3つの章からなっている。1978年のE. サイードの著書に触発されて、すでに20年以上にわたって現代地理学において論じられてきたテーマであり、ヴァレンタインは食物、身体、日常生活に関して、スレイターは、主としてラテンアメリカ諸国におけるアメリカ帝国主義に関して、そしてワッツは「ポスト開発」のナイジェリアのオゴニランドに関して、それぞれ、自己と他者(これは二項対置ではないだろうか)の同定と結びついた想像の地理についてのすぐれた論考をすでに発表しているで、このパートでは具体的事例にもとづいて、空間は見出されるものではなく、作り出されるものであるという執筆者の主張が説得的に示されている。ワッツの場合、「土台・上部構造」というマルクス主義の二項対置をむしろ創造的に展開しながら、ポスト構造主義の言説による「ポスト開発」の分析が、地理的想像力が社会的実践においてもつ意味を理解するのに限界を持つことを見事に指摘している。

第3部の「地理学と差異」は、社会的、政治的、経済的差異に空間的表現を与えるのには、

想像の地理がたずさわるのであるから、第2部と密接に関連している、あるいは第2部の議論の発展であると考えられる。D. シブリーの第6章は、排除の空間が形成されるメカニズムを、精神分析学の理論を用いて解明したものであり、建造環境における「心理・社会の地理」の重要性を指摘したものとして意味をもつであろう。これに続くS. J. スミスの「差異の文化政策」は、シェナのパリオとスコットランドにおける毎年の境界の検分を手がかりにして、空間的な境界の画定の問題を一般化して論じている。ヘゲモニーをもつある境界が消滅すれば、それに代わる特定のヘゲモニー境界が出現するわけであり、差異の地理は、彼女が述べるように、現在のところ過度に理論化され、十分に特定化されていない傾向にあるから、この章は非常に斬新であり、説得力がある。皮肉なことに彼女の説明は、フォーマルな権威対非合法闘争(たとえば儀式対カーニバル)、権力中心(境界づけられている)対抵抗空間(境界づけられていない)、モダン・アイデンティティ(集団化・秩序づけられた)対ポストモダン・アイデンティティ(個人化された)という見事な二項対置のうえに成り立っている。彼女はまたH. ババとb. フックに依拠しながら、境界あるいは辺境がジェンダー化されることを指摘しつつも、すべてがE. W. ソージャの言う「第三の空間」、あるいは生きられた空間になるわけではないことにも言及している。境界の設定と境界を越える問題を通じて形成されるアイデンティティの地理については、G. プラットによっても、ヴァンクーヴァーで働く女性の極めて日常的な事例を手がかりにして論じられている。日常的な空間を題材にして、境界の物質性と差異を恒常化させる政治的役割との関係を論じた好論文である。

第4部は「権力の空間性」と題され、ここにはJ. アグニュー、J. アレン、およびS. ラドクリフによる3つの章がおさめられている。アグニューの論文は、現代のトランス・ナショナルな新保守主義と世界の両極化をもたらしつつあるグローバリゼーションのもとにおける地政学を論じたもので、彼の先行する研究に馴染んで

いるものにとっては、非常に明快に問題点が整理された論文であるといえよう。アレンの論文は網羅的に文献をサーヴェイしたもので役に立つし、ラドクリフの論文はラテンアメリカにおけるエスニシティの事例に言及してはいるが、権力の言説と領域的アイデンティティとの関係について高度に一般化された議論である。この2つの章については、さまざまな具体的な状況のもとで、抵抗の実践がどのようなかたちをとるかを明らかにすることが、今後の課題となるであろうし、そのことをラドクリフも指摘している。

第5部は「空間と場所とを再考する」で、ここにはG.ローズ、E.ソージャ、D.マッサー、N.スリフトの、それぞれテーマも論点も異なる4つの論文がおさめられている。1996年の著書*Thirdspace*の要約であるソージャのものを別にすれば、それぞれ新しい問題点をいくつか提起した章になっている。マッサーの章は、第1章の内容の発展である。新しいアイデンティティ・ポリティックスが、多様な地理的想像力によって作り出される空間、ハイブリッドなローカル・カルチャーがかたちづくるモザイクを必要とすることが述べられている。スリフトは20世紀の社会理論の系譜を見事に整理しているが、彼の意図は、これらの社会理論を時間的および空間的に肉づけしようとする場合に遭遇する困難を指摘することにあったと考えられる。彼の主張は、社会理論は表象として提起されるべきではなく、世界との関係における営為の中で構築されなければならないというものなのである。ローズの文章は、現代の知的世界一般、特殊的には人文地理学における言説のマスキュリニスト的・ファロセントリックな偏向のいくつかを指摘したものである。

第1章の編集の主旨にも書かれているように、本書全体の問題意識は、1970年代から1980年代における政治経済学的パラダイムの卓越に対する反省、あるいは反動を理論化する点にあった。しかし、以上の簡単な内容紹介からも明らかなように、執筆者によってマルクス主義あるいは政治経済学的パラダイムに対するスタンスは非常に異なっている。換言すれば、

政治経済学あるいは物質世界に関しての一貫した理論的観点を、本書から読み取ることはできない。『今日の人文地理学』と題されていながら、本書全体に共通しているのは経済経済学的言説の完全な欠如である。あるとすれば、政治経済学的概念の恣意的なつまみ食いだけである。また二元論あるいは二項対置の克服ということが第1章で強調されていながら、すでに見たように、その理解が非常に多様であることがわかる。それを物質世界における対置と理解するものから、理論的カテゴリーあるいは言説の対置と理解するものまでがある。したがって、分析においては、章によっては対置法が用いられたりするわけである。また社会的構築論は、少なくとも編者たちによっては否定されているが、何人かの執筆者によってきわめて有効に利用されている。

各執筆者が用いている文献はもっぱら英語のものであるし、その著者は、エスニシティは多様であっても、欧米で仕事をしている知識人のものである。社会理論に関してはいくつかの文献が英訳されているので、ヨーロッパ大陸、とくにフランスのものが参照されているが、それ以外のモノグラフあるいは経験的研究は、少数の例外以外は英語で書かれたものに限られている。

編者たちは、第1章で本書を「ある種のマニュフェスト」と表現したが、本書によって特定の学問運動が起こることを編者たちは期待してはいないだろうし、また本書が、この学問の将来を予測するものでもないことは、編者たちによってはっきりと断わられている。「ある種のマニュフェスト」という意味はしたがって、プラクショナーに1つの展望を示すという意味にすぎないであろう。すでに指摘したように、イデオロギー的および方法論的な一貫性を欠いているうえに、内容に関しても中間報告的なものであることは否めない。また、研究動向の把握に関しても決してグローバルなものとは言えないが、今日の人文地理学のプラクショナーにとっては、非常に刺激に満ちた読み物であることだけはたしかである。

(竹内 啓一)